

今号は、1学年図書委員さんが選んだお題「今年度読んだ本の中で、1番印象に残っている本」第2弾です。(有→蔵書あり)。

春休みの長期貸し出しも始まっています。春休みは学年の節目。この機会にぜひ、心を豊かに、自分を成長させてくれる読書に挑戦してみてください。

『とある魔術の禁書目録』

(既刊55巻)

鎌池和馬 著

KADOKAWA



僕が1番印象に残っているのは『とある魔術の禁書目録 (インデックス)』という本です。この本は、本屋で偶然見つけて買いました。

この物語は、超能力が科学によって解明された世界が舞台。無能力者(レベル0)の主人公が、とあるシスターを拾うところから始まります。おすすめシーンは、3巻の、レベル0の主人公が、7人しかいない最強の超能力者(レベル5)の第1位と戦うシーンです。どれだけボロボロになっても立ち上がり、向かっていき、勝利を掴み取ります。

現在55巻(本編52巻、短編集3巻)まで出ている大長編ですが、ファンタジー系が苦手な人でも読めるので、ぜひ読んでみてください。

(パンネム フィクサー)

『四度目は嫌な死属性魔術師』

(既刊8巻)

デンスケ 著

一三書房

No printed

今年度読んだ本の中で1番印象に残っている本は、『四度目は嫌な死属性魔術師』です。

この小説は、102人が船で沈むところから始まります。全員死んでしまうのですが、その後ロドコルテという神が現れ、「転生するか、しないかを選べ」と言ってきます。1人は「しない」を選び、消えてしまいます。その他の人々は転生を選び、主人公も転生を選びます。しかし神の間違いで、主人公に与えられるはずだったチート的能力や幸運が、名前の似た別の人間に既に与えられてしまっていたため、主人公には不幸な転生先が与えられることになってしまいます。転生先で主人公は、10年以上実験のモルモットとしての人生を歩み、苦しみの中で人生を終えます。死後、再度の転生を願う主人公はロドコルテの元を訪れます。しかし復讐に燃える主人公に恐れを抱いたロドコルテにより、呪いをかけられ転生することになってしまいます。

3度目は、ゲームの様な世界でダンピール(ダークエルフ)として生まれた主人公。優しい母の元に生まれ、2度目の人生のことを忘れて平和に幸せに生きようとしま。しかし徐々に辛いことが降りかかり始め……。

吸い込まれるストーリーなので、ぜひ読んでみてください。

春休みの貸し出し

図書：5冊まで

雑誌：2冊まで

返却期限は4月12日(火)です。

裏面に続く

『発酵食品礼讃』



小泉武夫 著
文藝春秋



私が1番印象に残っている本は、担任の小山先生が紹介してくださった小泉武夫の『発酵食品礼讃』です。

私は「キビヤック」というカナディアン・インディアンという民族が作る伝統的な漬け物を初めて知りました。また、世界一臭い食べ物「シュール・ストレンミング」や日本の臭い食べ物の代表「くさや」のことも初めて知りました。

発酵食品は、元の食品よりうま味を強くし、栄養価や保存性を高めてくれます。そして何より腸内環境も整えてくれるので、免疫力アップに最適な食品だと思います。

私が知っている発酵食品は、納豆、味噌、かつお節、醤油、ヨーグルト、キムチです。キムチと納豆は時々、ヨーグルトは毎日食べています。味噌は味噌汁に、醤油は何かの料理に掛けたり付けたりしています。

発酵食品には色々な種類があって素晴らしいので、たくさん食べて免疫力を高め、新型コロナウイルスの感染予防に努めたいと思います。

(パンネム ホンダシュウバ)

この春心を豊かにしてくれる本

館内の特設コーナーでは、「この春心を豊かにしてくれる本」をテーマにおススメを展示しています。いつもは読まないジャンルに挑戦するなど、自分磨きにご利用ください。



図書館より Plus!

『事件現場清掃人 生と死を看取る者』

高江洲敦 著
飛鳥新社



「特殊清掃」という仕事をご存知でしょうか。

孤独死などの変死体があった部屋の原状回復を行う清掃業のことです。

この本は、このような説明から始まります。

タイトル→『事件現場清掃人』。表紙絵→防毒マスク着用の男性。帯の一文→「あなたの“死に様”かなえます」。冒頭→「特殊清掃」についてのぞくりとする説明。これらから、どのような内容の本なのか想像してみてください。……できましたか？ 今流行りの「大げさなタイトル、煽り文句、画像でバズりを狙ったもの」と思ったりしませんでしたか？ そう思って読み始めると、痛い目をみますよ。それ程に、覚悟を持ってページをめくった方がいい1冊です。



著者は、特殊清掃、遺品整理、不動産処分などを行う「事件現場清掃会社」を設立し、これまでに3000件以上の事件現場に立ち会った事件現場清掃人。その著者が、事件現場でたった独り、誰にも看取られずに無くなる「孤独死」をなくそうと、その現実を世に伝えるために記されたのがこの本です。

孤独死は、高齢化、過疎化、単身世帯の増加、経済格差、人的交流の欠如、新型コロナウイルスの蔓延……など様々な理由により、その数は年間32,000人にも上るというデータがあるそうです。とはいえ、家族や親類など、引き取り手がいる場合はいい方で、「行旅死亡人」という、身元不明で名前も住所も判明せず、引き取り手のない場合もあるそうです。この本にはそれらの事例が現場のモノクロ写真と共に紹介されており、とても胸が痛みます。ですが最後には、家族や親類、周りの人たち、そして自分を大切にしようと思えるはずです。ぜひご一読を。